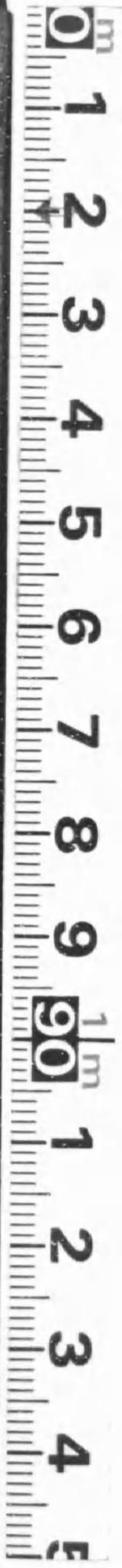


特 217

2

生命とは如何なるものなるや



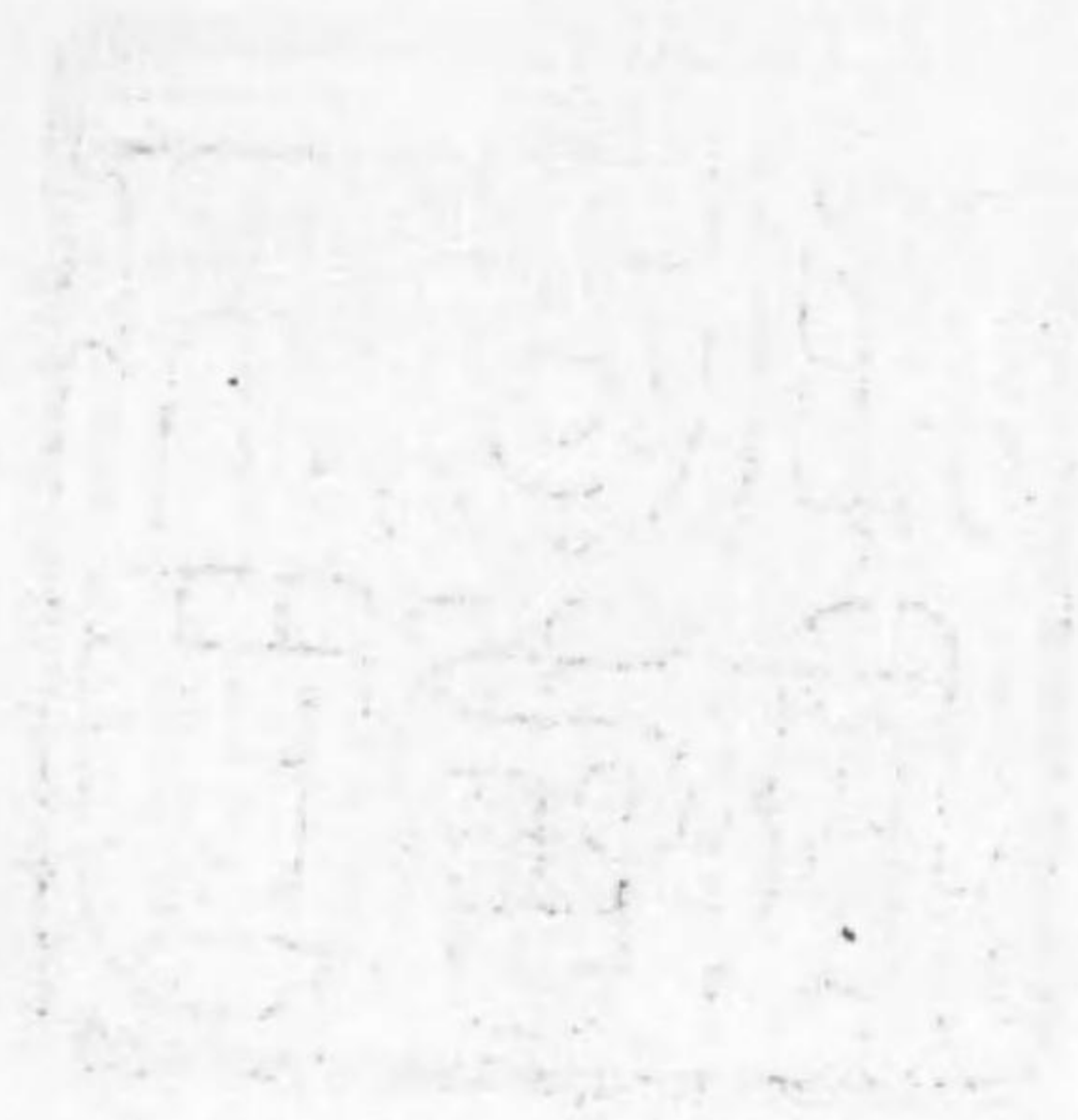
始



特217
2



は如何なるものなるや



生命の表題に就いて

之の生命なる語は、時と、處と、位置、により、種々、名を、異になし、心、靈、魂、意、識、智、など、之れを合せて、心靈、靈魂、意識、智識、精神、などの、字句は、多々あれど、本書には、其の内の、心、及び、心靈、を多く代表詞として、用ひ、之れを、科學的に解剖し、且つ其の、生命の、終始をも論じたるものなり、其の、生命の、終始とは、即ち、人世の、終始なるが故に、此所に人世觀をも掲げ、其の人生の、禍福、離合、榮枯、盛衰、等の因つて來るべき原理を擧げ、又其の結果の、理を、明らかにせんとし、遂に、神佛の實在をも、證明せんとしたるものなり。

緒言

予は人生とは、如何なるものなるや、神佛とは、如何なるものなるや、將た亦心靈とは、如何なるものなるや、宇宙とは、如何なるものなるや、と、茲所に、三十有餘年、然るに、佛典の、賴耶緣起に、宇宙人生の根源は、「阿賴耶識」即ち、心である、とあり、印度哲學の、「ウパニシャッド」には、全宇宙は、アトマン、即ち、我、なり」とあり、又歐洲哲學の、ストア學、には「人間は宇宙理性の分身であり、徳とは、之の理性に従ふこと」であると、又孔子は「道の本源天に出で其の實體は已に備はれり」と曰はれ、之の賴耶緣起、印哲に依るも宇宙と心、(心、即ち、心靈、心靈、即ち、我)、とは、理に即して、同一根源にして、又、ストア學、孔子に依るも、宇宙、即ち天と人生道德との根源は、事に即しても、實に同一根源なるを、吾人等に、教へられてある、此所に於て、始め

て、知る。

人生の根源真理、と、宇宙の根源真理、と

道德の根源真理、と、心の根源真理、とこの四つの根源真理は、理に即しても事に即しても、只「一」なるものにして、皆同一根源なるを、同時に、之の裏面には、實に終始一貫せる、條理、あるを、知る、従つて、之の條理なるものは畢竟、我、ありてなり、我は、又、我が生命、ありてなり、依つて、此所に、生命とは如何なるものなるや、との、問題の下に、我が所見を述べ、以て弘く、世に、其の批判を乞ふ所以のものなり、讀者幸に、之れを諒とせられんことを。

目次

緒言.....一

一、人生と宇宙.....二

二、宇宙と人類.....二

三、心の本體と、心の生ずる原理.....四

四、靈魂論.....六

五、心の生じつゝある原理.....六

 (イ) 萬象の絶對點と我が絶對點との關係.....六

 (ロ) 心の基點.....八

 1、解剖的部位.....八

 2、心と生命.....九

 3、萬象の絶對點と我が絶對點との結論.....九

六、心靈.....九

 (イ) 前部.....一

 (ロ) 中部.....三

 (ハ) 後部.....四

 (ニ) 靈王の作用.....六

 (ホ) 靈氣.....七

(ハ) 生命と靈魂……………	一七
(ト) 理の線と業種子……………	一九
(チ) 病氣及罪業の根本原理……………	一九
七、人 生 觀……………	二二
第一、人生觀と理の線……………	二二
第二、人 生 觀……………	二六
第三、人 生 觀……………	二六
八、神 佛 論……………	三三
1、哲學的神佛論……………	三三
2、條理的佛論……………	三三
(イ) 本 體 論……………	三三
A、智 的 本 體……………	三五
B、慈悲的本體……………	三七
C、結 論……………	四三
D 現代の世論及學術……………	四四
(ロ) 實 體 論……………	四五
A、現實的神佛論……………	四五
B、極樂及び天國と神佛……………	四七
(ハ) 神 人 論……………	五〇
九、理の線及熟語……………	五三

生命とは如何なるものなるや

一、人生と宇宙

抑々、人生及び道德とは、如何なるものなるや、を、了解せんとせば、第一、神及び佛、とは、如何なるものなるや、を、了解せざるべからず、神、佛、を、了解せんとせば、我が心、を、了解せざるべからず、我が心、を、了解せんとせば、先づ、宇宙、を、了解せざるべからず。依つて、この、宇宙を了解すれば、神、佛、の本體及び、現實的、神、佛の實在をも、了解なすに至る。

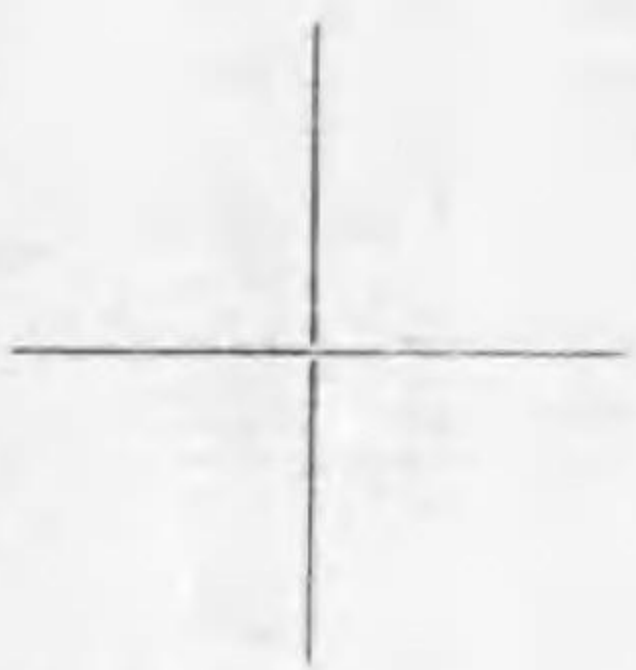
而して之の本全の、神佛を了解し、始めて、我が心、とは、如何なるものなるや、を知るに至る、其の心の、本體を、了解して、始めて、人生、とは如何なるものなるやを、了解なすものなり。故に先づ

宇宙と、我が心、との關係より説明せんとす。

二

二、宇宙と人類（即ち我が心）

先づ此所に、宇宙と、我が心の心じつ々ある、現象の關係を、了解せんとせば假りに左圖の如く。



合致點に、點を打つとすれば、

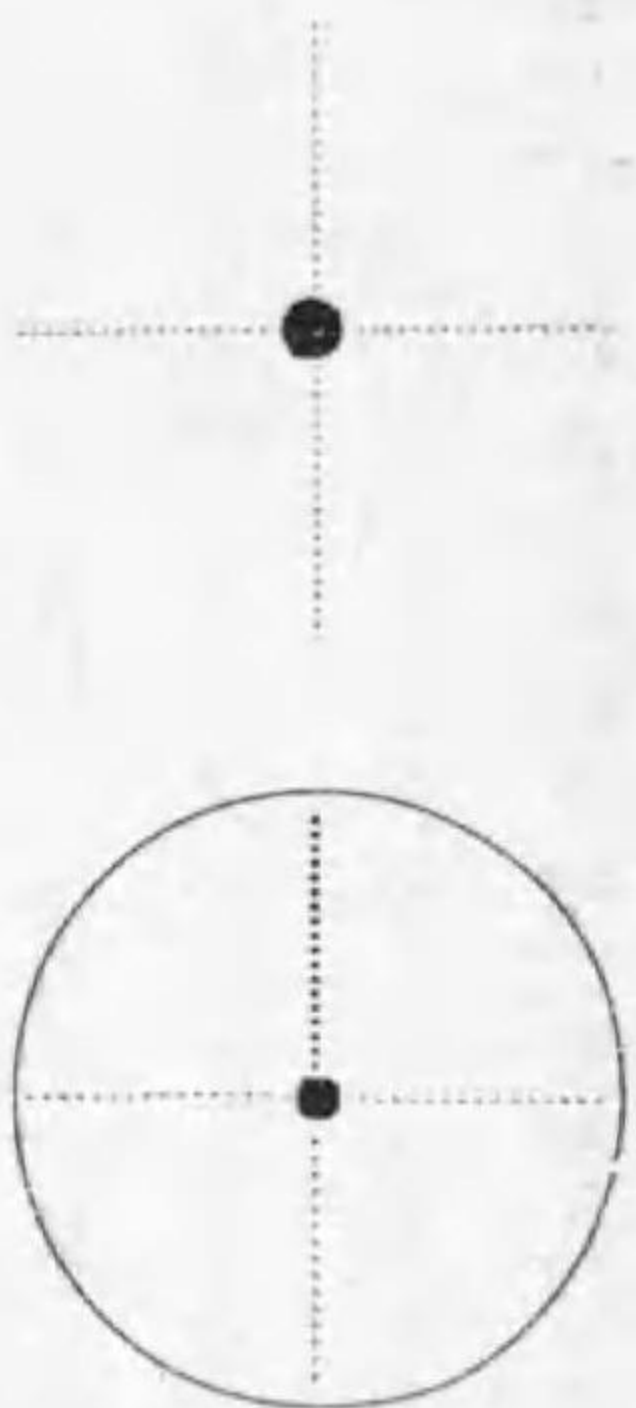
其の點に相當すべき、他の點は絶対に無し、故に之れを（絶対點）と、名づく（理參）之れ佛教の禪の根本眞理にして、維摩の一默とは、即ち、之れを云ふな

り、

又其の無邊際と、無邊際、無始と

無終へ、圖の如く

圓を描くとし、尙ほ之れを、一つ



の、球と見れば、他に之れに相當すべき、球は、絶対に無し、故に之れを、絶対球、又は、絶対界、と名づく、これを「ギリシヤ」の大家、*「パルメニデス」*、が（宇宙は自足圓滿の、一つの精巧なる球である）と云はれたのである、

又、「ニコラス」クサーヌス、は曰く、「常に人間は實在の中心點に自分が立つて居るものと見るで、あらう、と云ふことを、暗示した」と云はれて居る、

實際其の宇宙の中心點、即ち絶対點が我が心である、我れである、従つて同時に又、之れを單に「理」と云ふのである、が尙此の「絶対點」と「我が心」、即

三

ち、人類との關係は、心の生じつゝある、原理と同一なれば、項を逐ふて之れを明らかにせんとす。

四

三、心の本體と心の生ずる原理

第一我が心の生ずる原理を明らかにせざれば、靈魂の、滅、不滅、未來の解決再生の理、理の線(理參)、即ち因縁に於ける、因果の理、及び、人生に於ける、善惡、禍福等の因つて起るべき、根本の、原理は、到底何千年繰返すとも、解決なすものにあらず、然らば、心の本體、とは、如何なるものなりやと云へば、元來、心の本體は、物質にあらず、又、物質が瓦斯體に變ずるとき、現はるべき、火の如きものにして、又、火にあらず、熱にあらず、之れ斷然、一種の、特種體にして、従つて、其の作用も、特種の作用あるは、世人の能く知る處ならずや、然らば、其の心の本體とは、如何ん。

之れを、佛典に曰く、宇宙萬有は「地、水、火、風、空、識」の六大より成ると、之れ、地(木、金、土)にあらず、又、火にあらず、水にあらず、風(萬有の動き)、にあらず、又、空(瓦斯體)、にもあらず、之れ只、識は識、にして、物的一切萬有の、元なり、否な元なるのみならず、之の、識、ありて、一切萬有あり、一切萬有ありて、識、あるなり、識、とは、とりもなほさず、心、の事なり、故に佛典に曰く、「宇宙の一切萬有は、皆な之の心より生ず」と、又、大哲學者、フエヒネル、曰く「物、心、は同一本質の兩面なり」と。

然らば、之の、宇宙萬有は無始無終にして、且つ、不生、不滅、なるが故に、心の本體も、又、無始無終にして、不生、不滅なりと、云ふべし、

故に心は、生ずる、始めもなく、又、滅する終りも無しと云ふべし、之れを、心の本體、と、云ふ、尙(生命と靈魂の項參照)

五

四、靈 魂 論

心は、即ち、心靈、にして、心靈は、又、靈魂なるものなるが故に、靈魂も又無始無終にして、不生、不滅、のものなれば、其の始めも、在るに非らず、無きに非らず、終りも、又、在るに非らず、無きに非らずと、云ふべし。

五、心の生じつゝある原理

(イ) 萬象の絶對點と我が絶對點との關係

我が身體より、心の生じつゝあるは、恰も、

蠟燭の尖端より、火が燃へつゝあるが如きものにして

我が腦の意識の、中樞點、と宇宙萬象の、絶對點、との、接觸に依り、「心が

生じつゝあるのである」、が尙精しく云へば、それ宇宙萬象は、事々無碍、とて各々、大小無量の物質が、生じては滅し、滅しては生じ、爲し居れども、之れを大にしては、理事無碍とて、一切萬有、悉くが、我が

心を中心として

生滅無盡に、廻轉しつゝあるので、ある、

之れを、「唯心廻轉」と云ふ、故に、佛教の、起信論の、要中の至要、極中の至極で、あると、云はれる、立義分中、に、「宇宙の萬有」悉く是の一心に攝まり、目を開けば、萬物、其の前に現はれ、目を閉づれば、萬物忽焉として隠れ、上は佛界より下は迷界に至るまで、一切の諸法、是の心を離れず、天地萬物は、皆心の影にして、心なければ、佛なく、亦衆生も無いのである」と、曰はれて居るのである。

以上を宇宙萬象の絶對點と、我が心との關係と云ふ、依つて、宇宙の絶對點は

我が心であるから。

我が心が、宇宙の絶対點を作つて居るのである

(ロ)心の基點

1、解剖的部位

心の解剖的部位は、視中樞、聽中樞、嗅中樞、運動中樞、運動性言語中樞、觸覺中樞、溫中樞、などの七中樞は、それ／＼後頭葉、顳顬葉、前頭葉、などにありて、其の腦底より、嗅神經、視神經、動眼神經、滑車神經、三叉神經、外旋神經、顔面神經、聽神經、舌咽神經、迷走神經、副神經、舌下神經、などの十二對の神經を出だし、且其の紆餘曲廻せる、統一的中心部は、原形質突起を有する神經細胞の集合せる、灰白質と、神經纖維の集合から成る白質とより成る、「其の主腦は神經細胞なり」とある。

2、心と生命

而して右の如き、解剖的部位は、生命のなき人體にもあり、生命のある人にもありて、未だ、生命とは如何なるものなるや、を、見し人は無いのである、此所に於て云はん、生命とは、心、即ち、識、なれば、之れ物質にあらざればなり、

(前項参照)

3、萬象の絶対點と我が絶対點との結論

故に之の原形質突起部より、生命、即ち、心の生じつゝある無名の部は、これ超物質的點、なるが故に、之れを人に即して、我が絶対點と名づく。

而して、前記の萬象の、中心點、即ち、絶対點、と之の我が、絶対點との「接觸」に依り、即ち

心が生じつゝあるのである

之れ、恰も、宇宙の一切萬象は、

一個の車の如く

而して(我が心)、即ち我が、絶對點、なるものが、

其中心となりて

一切萬象が、前記の如く、生滅無盡に廻轉しつゝあるので、あるから、これ恰も鐘と撞木との、接觸により、音が生ずる如く、

又、蠟燭と空氣との、接觸により、火が生じつゝあるが如し。

然して、宇宙の絶對點は、我が絶對點である。

何んとなれば、宇宙ありて、我あり、我ありて、宇宙もあるが如きものなればなり。

之れ前記の如く、目を閉づれば萬物皆隠るゝが如し。

故に、此所に重ねて記す、宇宙の絶對點は、我が絶對點にして、我が絶對點は宇宙の絶對點である、これ、二者あるにあらず。

(二者)、が同一絶對點なり、何んとなれば宇宙の絶對點は、我ありて、我れが其の宇宙の絶對點で、あるからである。

之れ「ウバニシャツド」に、

全宇宙は、アートマン、即ち我なり

とあるは、即ち之れを謂ふべし、以上を、心の生じつゝある原理と云ふ。

六、心 靈

心靈は、もと無形のものなれども、其の形相を、恰も卵を横にしたるが如くに想起し、之れを考察すれば、容易に諒解し得るものなり、而して之れを、更らに前、中、後、の三部に分ちて考察するを便宜とす。

(イ) 前 部

前部を、更らに二部に分ち、其の第一部は、眼、耳、鼻、舌、身、意、の六官より來る知覺を中部に送る事情と、直ちに外部に反射なす事情とに分ち、（外部に直ちに反射なす事情とは、假令ば手拭を取る、石鹼を持つなどの如く、極く手輕き事項を云ふ）

中部に送る事情とは、散歩、掃除、洗濯、及び一般的普通日々の課業を云ふ。第二部も、又、二つに分つ、一つは

日々の自轉車の乗車などより、最熟練せる、輕き日常の慣れたる技術に於ける手足などの、一般的活動を云ふ、（これ一々深き考へなくして、他に何か考へつゝも爲し得る技術などを云ふ）、又、一つは、

輕き談判、掛引、等其の他、其場々々の、深き考へなくして、爲すべき事を云ふ。

此の部の長じたる人を俗に頓智の良き人と云ふ。

（ロ）中 部

中部に於ては、一層重大且つ緻密なるものにして、其の前面に、（恰も、レンズ、あり、フィルム、あるが如し）「以下、之れを、合成化したるものを、靈鏡と云ひ、又、これを中部の靈鏡と名づく」而して、前部に有りし事情を、之の靈鏡に依り、一切を記録に残し、且つ中部には、中部の部長ありて、古今、東西、幾千卷の記録を、一瞬時にして調べ出し、之れを、

後部に送る事情と、直ちに前部に反射なす事情とに分つ。

前部に、直ちに反射なす事情とは、前部より送り來る事を直ちに處決し、之れを、すぐ、前部に反射なすを云ふ。假令ば、日々の掃除、洗濯、散歩、其の他日々の一般的課業等にして、

後部に、送る事情とは、一々靈王の裁決を要するなどの事情、假令ば、議會の

如きものゝ、招集をもなし、又觀念の改良、思案などをもなす。又普通思念部ありて、日々の課業、假令ば、建築家、旅行家、貿易商、工場長などの要する思念をなす。又、此の部の尤も長じたる人程、記憶が強く、何事をも忘るゝことなき、賢明多才なる人と云ふべし。

(ハ) 後 部

最後部も、又、靈王部と、靈氣點、とに分つ、(一)靈王部、之の靈王部の尤も長じたる人は、思慮甚だ深く、考案、發明、理想、及び、記憶、觀念、認識等の最も秀でたる人にして、

又、大發明、大發見、大貿易商、豪商、博士等、其の他、破産、貧苦、失戀等の「意志」は皆、之の部にあり、然して之の意志、即ち、靈氣は、大となく小となく、皆な、之の部より發するものなり、(假令ば、之の部には、恰も、各大

臣の閣議の如き、最高議決機關ありて、中部よりの調査に基き、會議に會議を重ね、靈王、又、之れに參與し、其決議事項を發令す)、これを、

靈氣を發すると云ふ。

(二)靈氣點と靈王、之の靈氣點は、即ち、我が絶對點なると、同時に、宇宙の絶對點と、合致する所なり。

又、我が絶對點は、宇宙の絶對點にして、宇宙の絶對點は、又、我が絶對點なることは、前項絶對點の項に記したる如く、之れ、二者、あるにあらず。

二者、が、合致して、心が生じつゝあるのであるが之の、心靈を記するに當りて、此所には、之の二者が、合致するを、即ち

靈王と云ふなり、又、之の靈王を、理に即しては、單に

理と云ふのである、(理參)

且つ以上の、心靈を順次書き別けしは、只、之の

理の一字を、現はさんが爲めである。

(之れを佛典には眞如と云ふ)

(二) 靈王の作用

假令ば、靈氣點は、絶對點と、萬象と、理の線とより成る、家にして「靈王」は其の家の主人なり、釋尊が「心は巧なる畫師の如し」、と曰はれし如く、其の主人公は、中部の靈鏡を用ゆること、恰も、寫眞機好きの主人なるが如く、其の主人公は、年中、之の寫眞機と起居を俱にし、一刻も離れたることなし、この主人公が、之の寫眞機を全く離れたるときは、即ち眞の無我に入りたるときとも云ひ、又精神の統一したるときとも云ふ、而して其の主人公の任務は前項の如く、靈氣を發するを以て任務とす、

(ホ) 靈氣

又、之の靈氣は、靈王即ち主人の命令によりて、時間、空間、を問はず、自由に、靈氣點より、隨處に出張し、任務を果すものなり、之れを、二つに別ち、一つは、常習的の最高熟練なる技術者などの、眼、手、足、などに行くを云ふ。又一つは、深き理想に耽るなど、考案、心配ごとなど、俗にこれを(夢中)などとも云ふ、假令ば、課業を爲しつゝ他に何か考へるなど、又、我が身を忘れて、都會などに居る子女を思ふが如し、且、之の靈氣の元を佛典には業種子と云ふ。尙之の、靈氣の作用等については、現今世に實驗心理學、又は認識學等種々あれば、本書は此所に之れを略す。

(ハ) 生命と靈魂

夫れ一切の生物には、如何なる最下の「アミーバ」、に至るまで、生命、即ち、靈のなきものはあらざれど、之所には、我が人類に即してのみの、生命を云ふ、而して、我が人類の、

生命とは

前記の靈氣點を、是れ即ち、我が眞の、

生命とは云ふなり、何んとなれば、絶命後は、吾れに肉體無き故に、前記の(絶對點)、もなく、随つて、萬象との關係もなき故(靈王)も無し。

従つて、之の、靈氣點も無し、故に、生命も無しと云ふべし、只残るは、即ち理と其の線と

靈氣即ち「業種子」とのみなり、之れを絶命後の、「靈魂」と云ひ、又之れを心の、元と云ふのである。

(ト) 理の線と業種子

又、之の靈王は、直ちに中部の記録の調査と相俟つて、靈氣を發するものなるが、此の記録所は、理の線の何萬何千年來の記録を貯蔵すること、恰も諸役所の記録倉庫の如し、故に此の倉庫を、業の種子のある處と云ひ、且つ其の記録を業種子とも云ふなり。

(チ) 病氣及罪業の根本原理

人生一代中の出來事は、一切何事によらず、一々、之れを靈王部へ通じ、其の「靈王の眞の裁決」を俟ちて行へば、病氣、罪業等、一切無し、(之れ君主の命、又は國法に定めらるゝ一切の法規を守れば、如何なる犯罪も無きが如し)但前生、前々生よりの理の線の記録に於ける、善惡、差引勘定に表はれし、最良

最善の結果を云ふ。

假令ば、寒暑共其の適度々々に、課業を爲し、自分は之の程度に於て仕事をなし、又此の程度に於て飲食をなせば宜しなど、身分相應に何事も爲せば、病氣罪業等無し。

然無くして、無益の悦樂に耽り、又或は遊惰に流れ、又暴飲、暴食、神經、筋肉の過勞及び運動不足等、之皆な

眞の靈王の指圖に非らず況て、自分の眞の靈王のあるを知らずして、只、其場々々の仕儀、結局思ひの儘、氣の趣く儘になすなど、早く云へば俗に之れを氣隨氣儘と云ふ。是れ皆な病氣及び罪業等の原因となり、前記の記録に残り残りて、重なるものにして、これ現世にありて或は病氣となり、又、次、の世に持ち越し、此の理の線に據り、其の記録に残りし、罪業を清算すべく、
又生れねば、ならぬのである依つて

「之れを再生の根本原理と云ふ」

是れを佛典には恐れても「恐るべき盡させぬ業の種子」と曰ふ。尙ほ心靈に就いては、寒暑、甘鹽、美醜、などの作用あれど、茲所には只日常の動作を以て表はしたるものなり、

七、人生觀

第一 人生觀と理の線

然らば、吾々は、何故に生れ來たりたるや、と云へば、之れ取りも直さず、前生、前々生、よりの靈魂、即ち、心ありてなり。

心は又理なることは別項の如し、又此の理なるもの、連關止むことなき、延長を、線と云ひ、合せて、之れを、理の線、と云ふ、佛教にては、之の理を因と云ひ、線を緣と云ひ、併せて之れを、因緣、と稱す(理參)故に人は皆な此の如き

理の線、ありて、各自、日々の所行に禍福あり、又、善惡、あるなり、大聖釋尊、曰く「今世に受くる(禍福)所のものは、前生の果なり、今世に爲す(善惡)所のものは、後世の因なり」と、又佛典に曰く、「善人は善を行じて、樂より樂に入り、明より明に入る、惡人は惡を行じて、苦より苦に入り冥より、冥に入る」と。

依つて現世に一家和合し、且つ財に富み、無病長命なるも、家内不和合にして貧、且つ病弱短命なるも、一生不治の病に苦しむも、又不具者に生るゝも、生れて後ち不具者となるも、皆之れ幾百の前生、前々生よりの、理の線(因縁)、のありて、之れを清算すべく生れ來たりたるものなり。

依つて、前生よりの重ね重なる善行ある人は其の報ひとして、益々、貴人、富豪、強身にして、且つ天才智謀に富むなどの幸福を持ちて生るゝものなれば、之れに乗せず、誇り高ぶること無く、又人を誹り、侮らす益々善を行せば、益々貴

人に生れ、遂に神、佛などの地位に達し、又それに相當する、善良なる世界に生るゝこと疑ひ無し、假令ば、乃木將軍の如し、又前生、前々生よりの、惡行ある人は、其の報ひとして、貧賤、病弱に生まるるものなり、之れを知らずして、只他人を羨み猜むなどの行ひを爲し、且つ死後の己が恐るべきの因果の理、あるを信せず、況て彼の自然科学の如き、絶命後は、靈魂も何も無く、人間は死ねば、只、天地に還り、何の跡形もなきものなり、など云ひて、遂には是れが國家社會に及び、果ては、神佛をも輕んずるに至らんか、實にこれ他事にあらざるなり！

嗚呼、之の時に當り誰れか無きや。

大宗教育家出でよ！！ 大教育家出でよ！！

且つ個人々々にしても、此の如き天理に背く大逆罪を之れ事とし、惡行に惡行を重ねるときは、之の人間界より降りて、遂には、彼の佛典にたとへられし如

き、修羅道、畜生道、餓鬼道、などの極悪世界へ生れねばならぬのである。之れを大自然(即ち三世因果)の理と云ふべし。

又是れ、ストア學、の宇宙理性にして、之れ天の理なり、且つ宇宙の大真理たる大自然の理たること、一點の疑ふ餘地無し。

又吾々は、神又は佛が、生せしめたるものなれば、何故此くも諸種の惡業煩惱を、爲さしむるものなりや、と云へば、これ取りも直さず、前生、前々生より來りたる、果、が現世に現はれしものにして、善行をせんとするも、爲し得ず、まして惡行と知りつゝも、之れを爲さざるべからざるに至るも、之れ皆な前生よりの惡き結果が、晝夜身邊に付き纏ひ、惡行を勧め、煩惱に煩惱を重ねしむるものである。其他人生には幾多の不時災難ありて、意の如くならざるも、之れ皆な、前生、前々生よりの、惡因が、現世に惡果となりて現はれしものである。

又、現世の因が、來世、來々世にと現はるゝことは、恰も、天秤の如く、又、

車の如し、之れを、佛典には、「流轉輪廻」と云ひ、又更らに、

大聖釋尊が、之の宇宙萬有の大自然の大真理を、哲學的且つ科學的に説いて曰く、「人生の善惡報應し、禍福相承くは、數の自然なるを以て、其の所行に應ず」と、之れを分ければ、

現代語にては

善惡報應し、禍福相承くは 理の當然(數理學)

數の自然…………… 天秤の道理(科學的)

なるを以て其の所行に應ず 車の廻轉(機械的)

以上の如く、三千年以前に已に科學的に、因果の理の根原真理を明らかに説かれたのである。

然るに之の恐るべき、因果の理を信せず、身分を忘れ、世間を呪ひ、人を羨み瞋るが如きことあれば、之れ却て其の身に又、惡因に惡因を重ねしむるものであ

る。

かへすがへすも、悪因には悪果あり、善因には善果あること、恰も、天秤の如き、理あるを理解し、萬事忍耐を旨とし、善行に善行を爲せば、遂に悪果盡きて善因となる、善因は又、善果を承く、之の善果に、又、善因を作れば、遂には、最高善果たる、家庭圓滿なる家に生る、(ことを福と云ふ) 且つ富豪にして、(これを祿と云ふ)、無病長命なる、(これを壽と云ふ)、之の福祿壽、揃ひたる、(これを三福對と云ふ)、高位高官の身となり、遂には人間界より上位なる、樂土に生るゝこと、之れ又一點の疑ふ餘地なし。

尙ほ各自の禍福運命が幼年、中年、或は老年に至り、盛衰變化なすも、之れ皆な以上の因果關係の理に外ならざるなり。

第二 人 生 觀

第二、人生觀とは親の爲め、(たとへば父の亂行を諫めるの餘り憤死したる少女の如き)、又は主人の爲め、(たとへば赤穂義士の如き)、國家社會の爲め、(たとへば大政治家又は愛國の志士など)、又は、民衆の爲め、(たとへば佐倉宗吾郎の如き)、國民思想の爲め、(たとへば大哲學者、大思想家の如き)、其他、宗教の爲めなど、一々擧ぐるを得ざれども、之等の如き、一身を犠牲に供したる人の未來觀を云ふ。

殊に君國の爲め犠牲となりたる軍人の如き、其の善果の偉大なること、之れ一粒の米が萬倍の果を得るが如き、小なるものにあらず、何億萬倍の善果となり、其の身に報ひ現はれ來るものなるや、蓋し計り難かるべし、假令ば、今千人の犠牲を拂ひ一國を千年の安泰に置かんか、此間に於ける現在の國民一億萬とすれば其の一千一年間に何百億萬の國民が、枕を高くして眠ることを得るや。

且又、其の國民心境の永遠の快、幸福など、又、戰勝國民の子孫に遺る愛國心の

偉大なる、之れ實に無量と云ふべし。加之ならず、之れが爲め、商業に、工業に將た亦、農業に、學術に、其の發達の甚大なるに於ておや。

従つて、前來の如き種々の犠牲者の未來には、如何なる幸福を承くるものなるや。

之れ又實に、筆紙に能く盡す處にあらざるべし、之れに又一點の疑ふ餘地が無いのである。

第三 人 生 觀

第三、人生觀とは、自分の罪業にのみ、よらざる中年に於ける、運命の盛衰變化を云ふ。之れに二種あり。

一つは、震災、水害、火災、等にて一朝に百人又は千人、同時に死することあり、此の中には悪人もあらん、又善人もあらん、

之れ實に未來、實在の根元原理なり 何んとなれば、未來なくば、如何なる善人も死ねば、それで仕舞なり哉。

天の理とは、斯るものにあらず、幸にも前生よりの善根により現在に幸福を持つて生れしも、不幸にして、數千人同時に死するときは止むを得ざるものなり、

且つ、若し現世のみにて未來なくば、善人は、何を以て、償はれんや、これ又、「次ぎの世に」其の善果を持ち越し、再び幸福の人生を受くること、亦た必然なり、

二つには前記の如き、運命の人の遺族を云ふ、(世に俗にまきぞへに遇ふ)、と云ふなどの人の身の上、並に、

第二、人生觀の如き犠牲になりたる人の遺族、又は、大酒の爲めなど、其の他種々の原因にて、早世したる人の遺族、又は、商業、其の他の事情にて失敗した

る人の遺族、又は他人の債務の餘波を受け倒産の止むなきに至りしなどの人もあるべく、又、種々の事情ありて、寡婦の寂しき一生を送る人も、あるべく、其の他數へ來たれば、枚舉に遑なく、

又、早くより兩親には別れ

！

杖と頼む蕾の花の、我が子には先き立たれ。

！
！
！
！

そも、哀別離苦とは誰が事ぞ

！

今なほ、耳に残れる、母の聲、

！
！

先き立ち逝きし、子女の、其、笑——顔

！
！

實に人生の究竟はこゝにあるなり此の時に、あたり、

神、あれば、何故、我を救ひ給はざるや、

！

佛、あれば、何故、我を助け給はざるや、と、

！

本書は茲に答へんとす。

神もあるべし、又、佛もあるなり。

皆能く讀まれたし。

八、神 佛 論

一、哲學的神佛論

茲に神佛とは、如何なるものなりや、を、論ずるに當り、先づ古代「ギリシヤ」の大哲學者。

「プロテイノス」の神に對する思想を記さんとす、彼れは、西曆二百〇四五年頃「ギリシヤ」に生れし人にして、「プラトン」、「アリストテレス」、ストア學、等の「ギリシヤ」、哲學の綜合的、神に對する、大思想家なり、彼れは曰く、

神は純粹の（一者）凡て存在するものは多様なる要素、規定の統一により存在す

る故、一は多に先き立つ故、絶對的、一は凡ての存在の根原、一切の多を超越する故、全く無規定的故に、一切の有限者と異り、無限最高の、概念的規定たる、思惟と、存在とをさへ、超越。

神は何物にも優れたる、絶對的、實在、凡て存在するもの、根原にして、思惟及び其の、一切の、「規定の根原」、なりと、又曰く

宗教的意義を持つ、世間的道德、より、禁慾的道德、に進み、更らに、「ヌース」をも(理參)超越し。

絶對者と、合一、せんとする、夫れは總ての

反省、意識、を離れて、

神祕的、「エクスタシス」の状態に於て遂げられる。

純なる神の、光の中に、融け入つた、者は、神を觀るのみでなく、光り、其のもの、神、其のものとなる。

否なるのでは無くして、あるのである、と之れを哲學的、神佛論、と云ふ。

二、條理的な神佛論

以上の如く古來より、神、佛、の本體及び、實體については、種々の説あれど此所には是れを

(イ)本體論、(ロ)實體論、(ハ)神人論、の三つに別ち論せんとす。

(イ)本體論

第一、神佛、の本體を論せんとせば、先づ是の宇宙の本體には、慈悲と、智慧の二大別あるを、明らかにせざるべからず。

それ吾々は、父母又は養親の慈愛なくして、若し生るゝと同時に、野又は山に捨て置かれたらんに如何、忽ちにして、死せんこと必然なり、されば、世人は

如何にしても、慈愛を根本とせざれば、生き得べからざるものにして、慈愛なくば、人類は死滅し、従つて世界は、在りても無きが如し。

又、同時に必要なるは智慧なり、慈愛あるも智慧なきときは、時に、慈愛の功なきことゝなるべし。

母は家にありて、一意子女の慈育を旨となせるも、父なるものゝ、外より、吾家に歸り來らんか、忽ち、眼を子女の上に移し、其過食なきや、或は衣服の過不足なきや、又は玩具等の良否に至る迄、細心の注意を拂ふこと、これ偏に智慧の働きたと云はざるべからず。

故に母は慈愛を旨とし、父は智育を主とするものと云ふべし。

右の理に依り、各自、祖先より、祖先へと、尋究すれば、この大慈悲と大智慧の根本は、神又は佛と云はざるべからず。

尙ほ、この神、又は佛が、更らに其の、大慈悲、と、大智慧、の理を以て、宇

宙の根本より、吾々へ天使を降し遣はされたのである。(之れを神人と云ふ)されば、先づ智的本體より記さんとす。

A、智的本體

賢明なる諸彦よ、先づ自然科学の如き、色、香、音、などの、事物の現實のみに捉はるゝことなく、超現實的立場より、冷靜甚深なる、考究を願ふ次第である。佛典の維摩經の中に、大聖釋尊が、維摩居士に問ふて、曰く、

「汝は如來を、見ようとするのに、如何様に、なさるか」

居士の答へて申す様、「私は、私自身の實相を観る様に、佛を観るのである。私が如來を観るのに、前にも來らず、後にも去らず、今、其處にも居ない、姿も觀ず、形も觀ず、心も觀ず、四大より成るにあらずして、虚空に同じ三界の何れにも在らず、

又、華嚴經に「化樂天」、曰く

「手段を盡して、佛を求むれども、佛は居られない、之れを十方に尋ねても在し
 まさず、法身は示現するも、定在がない」と
 又ヨハネ傳(十四)に、

「神は肉體となりて、吾等の中に宿り給へり」とあり、

又我國の神統には、「生れ來ぬ前も、生れて住める世も、まかるも、神のふと
 ころのうち」と云はれてあり。

又、佛典、には、「如來は衆生の心想の内に入り給ふ」とあり。

又「諸佛如來は法界の身なり」とあり。

又「佛身は法界に充滿す」とあり、因に(宇宙萬有を佛典にては法界と云ふ)、
 故に之れを以て見るも、

神又は佛の本體は、宇宙の

「大自然」と云ふ外は無いのである。

それ宇宙一切は、理により生じ、理により滅し、一切理ならざるはなし(理參)
 凡そ不思議なる語は、畢竟我が、智力、思考力、の及ばざるにあり、然らば、之
 の大自然は、即ち、大真理にして、其の大真理の根本を、神又は佛、と云ふので
 ある、と同時に、又、之の

「大自然界一切を」、「神又は佛と云ふのである」

依つて、この大自然界を佛敎にては、法界と云ふのであるから、

佛身を、法界身、と云ひ、又、佛身は法界に充滿すとあるは、即ち、之れを云
 ふのである、且つ智の根本は、理、なるが故に以上を、智的、又は、理的、神佛
 の本體と云ふ。

B、慈悲的本體

之の慈悲的本體を書するに當り、その天の大慈悲の無量、無邊なる、又之の有
 難さを、如何に書くべきか！！ 如何に書くべきか、

書くに文字無くとも！　！　書くに一丁字を知らずと雖も、今は書かで、止む、時にあらず、書かで止む、時にあらず。

茲所に謹み謹んで烏滸がましくも、假令を以て之れを書き表はせば、今學校生徒の遠足會にて、山又は海へ旅行をなすに際し、教師達は其の生徒等に途中も相當注意に注意を加へたれど、其の中尙二三の生徒などは、道々草花に戯れて、遅るゝことをも知らず夢中に遊び居たり、既に先着の教師達は宿舍に於て果して、生徒に不足を發見せしかば、直ちに心當りへ引返し、諸方搜索を爲せしに、果して山蔭或は岩間に姿を發見せしが、彼等生徒は最早疲勞し、況て其の中の一人などは絶壁に落ち打ち倒れ居たり、受持教師は驚き宿舍に引返し、他の數名の同僚と共に現場に馳せ、辛ふじて、これを介抱し、連れ戻りしが、漸くにして、其の行届ける手當に依り、稍々元氣を恢復せしかば、師弟共に打ち喜び、漸く歸校することを得たりと云ふ。

以上の生徒とは吾々凡夫にして、途中相當注意に注意を加へたれど、とは、神や佛が三世の因果の理及び天國又は極樂などのあることを知らしめ給ふを云ひ、其の中二三の遅れし生徒とは、之の天の大慈悲あることを信せずして、日毎に、惡逆非道の、募る輩なり、されど、天の大慈悲は、之れ等をば、

殊更に見捨てること無く、神となり、佛となり、菩薩となりて、其國々々の言葉、又其國の、其人々々に分かるべき様の方法、喩言等を以て、救ひ助けんと、せらるゝのである、斯くの如く、神佛は、晝夜、護り給ふのみでなく、末は天國又は極樂へ必ず生るゝべく様あらゆる方便を以て、勧めらるゝのである、感謝！！
而して生徒即ち凡夫の身は煩惱とて、種々多少の罪業あるものなり、之れを全部捨て能ふ人と、全部捨て能はぬ人とあり、假令ば多情なる夫を持つ妻、又は青春男女の戀愛問題、或は少量の酒癖ある等、之れ

小兒に斷然、道草をなすたと云ふと同様である、到底之の罪業、煩惱、全部は

捨つる能はざるものなり、加之ならず。

老後に於ける、亡夫亡妻、亡父母等に對する已に過ぎし犯せし罪、又殺人罪などの、既に犯せし罪を如何にせんやである。茲所に於て、

大聖釋尊、曰く「只々疑ひなく佛を」

「念ずる、一念」「時、其時」

「全部消滅なすものである」と、之の有難き言葉や、只、只、

「神佛に感謝し ! 天に感謝するのみである」

但し、但し、但し、何程小兒であるからとて、餘り道草が過ぎ、旅行毎くく教師の厄介に成り、私は小兒である、教師はどこ迄も、幾邊でも搜して歸るのが當り前である、私は悪戯するのだ、悪戯は止められぬなど云ふ生徒は、末に如何になるか、

私は凡夫である、少々の煩惱は、あるものである、何程罪業ありても、佛は助

けて下さる、罪業煩惱は、私は何程しても宜い、止められぬと、

斯くの如き人の末は如何になることで、せうか、之れ佛典に譬へられし、修羅道、畜生道、餓鬼道、などへ段々に墮ちて行くのである。

○

○

而して、若又、山間僻地に生れ、一字の文字も知らぬ人もあるべく、其の上、親兄弟も無き、實に頼るべなき人もあるべし、斯る人よ、神佛は、我が姿が鏡に寫る如く、必ずくあるものなれば、自分には何の計ひもなく、只々一心に、日夜、神、佛を信仰すれば、未來は必ず、貴人、富豪の家に生るゝか、極樂へ生るゝこと、一點の疑ふ餘地が無いのである。(或る佛典に據る)

嗚呼、是れ天の大慈悲の聲 ! ! 是れ天の大慈悲の聲 ! !

嗚呼、是れ無くんば

吾々の如き、罪業深きものは、何をか頼みとして、日々の課業をせんや、何を

か目的として社界に立つべきや、是れありてこそ。

日々の課業も有難く、爲し得。

又有難く、衣、食、住、も爲しつゝあるのである、而已ならず、未來、永劫、如何ばかりの樂みと、安心と勇氣と、を得らるゝや、嗚呼、これ、限りなき、喜びなり！ 限りなき樂みなり！

△ △ △ △ △

故に、吾々に於ても、若し人の目上に立つ人は、之の慈悲の心を以て、下を憐み、助け ……

又、年若き人が修行の爲め、目上や主人に仕ふるなどのことあれば、之れ天命なりと心得、何事があるとも、只々、之れに従ふべきものである。

C、結 論

然して、以上の如く、この神佛の本體は、慈、智、圓滿なるが故に、是れ慈を

離れての智にあらず、智を離れての慈にあらず、故に、

一切萬有に遍滿なす、智(即ち、理)其のものは、この慈を離れての、單なる理にあらざるなり、

「而して、又、之の智なるものは、理より、出づるものなれば、理は、智の元と云ふべし、故に、佛の智は、こゝに、理と、云ふのである」

而して、又、之の、神佛の、理、其のものと、萬有に遍滿なす、理、其のものは、もと同一なるものなれば、之の、神佛の理、其のものは、一切に遍滿なす理、其ものである。

故に神佛の慈悲と智慧は、如何なる微細物質中に至る迄、宇宙の一切萬有に遍滿せざる所なしと云ふべし、故に、之れを大聖釋尊が、

佛の光明は十方を照らすに障碍なす所なしと曰はれたのである。
以上を神、佛、の本體と云ふ。

D、現代の世論及學術

今や世界東西を通じて、之の有難き、

「御教」は、只、吾、日本にのみ、有りと聞く、世人よ、近くは支那、印度より、西歐諸國に此の有り難き條理を一人たりとも、多く知らしめたくもなり、

而して、世界は、擧げて、今や、物質的、現實的のみに捉はれ、之の、精神的慈愛的、世論は殆んど、省みられざるに至れり。

嗚呼、之れを、如何にせん、翻へつて、鑑みれば、之れ實に精神的、心的、無形の「天の誠の根本眞理と」「人の誠の根本眞理と」は、其根原が（理參）の如く、只

（理）の一、なるものなることが、古來、明らかならざればなり、孔子、曰く、「道の本源天に出で、而して易ふべからず、其の實體は已に備はりて而して離る

べからず」と、又、曰く「誠は天の道なり、之れを誠にするは人の道なり」と、曰はれしは、即ち之れを云ふのである。

此所に於て、本書は、之の 天 と 人 との一貫せる根本條理を明らかに、なし、以て、其の「人道の大根本原理を樹て」

又以て「精神教育の絶対的根原眞理、即ち絶対原理を定めたるものなり」

(ロ) 實 體 論

A、現實的、神佛論

前述の如く云へば、神、佛の實體は果して無きものゝ如くなれど、

彼の大哲學者「フエヒネル」も「物、心、は、同一本質の兩面なり」と云へるが如く、且つ、心、ありて、物あり、物ありて、心あるは、物の下に心と云ふ

字を書きて、惣、と讀むを見ても知るべく。

又前項の、地、水、火、風、空、の五つは物質にして、識は心なるを以ても知るべし、故に本體論は、心的、にして、之の實體論は、物的なり、

其、物的、即ち、實體とは第一吾々の肉體にして、前述の如く無形の靈、即ち理なるものが、前世、現在、未來、と連關なすと同時に、有形的、前世の肉體も有りしものなり。

依りて現世にても、無形の理の線に據りて、現在に肉體を受け、世に出でしものなるが故に、未來にも、又之の理の線に據つて肉體を受けて、世に出づるものなり。

尙ほ進んだる、行ひの、善因善果の極は、遂に、天國、又は、極樂に生るゝ事は前項の如くにして、

而して、其の國土に生るゝときは、又、其の國土に應じたる肉體を受け生るゝ

ものなり、而して、其の國土中の最高國土、及び、其の最高衆生を實體的、神又は佛と云ふべし、されば、其の極樂、及び、天國とは、如何なるものなるや。

B、極樂及び天國と神佛

極樂及び天國を説かんとするに當り、先づ現代科學の宇宙觀の一部を記さんとす、科學者、曰く

「俗に、明けの明星、宵の明星と云ふ、太陽の近くに光る金星の世界は、地球よりも幾倍か豊富な、大氣を持つて居るから、年中濃厚な雲霧に閉され、大嵐や、大雨や、其他あらゆる、天候の激變に悩まされて、夏も夏らしからず、冬も冬らしからず、一瞬も豫測を許されない。状態である」と。

又、曰く

「元來、太陽は、矢張り、一つの恒星であつて、他の無數の恒星と共に、夏の夜の空を飾る、天の川を、形作つて居るのであるが、

之の天の川全體が、實は其の外の遠方から眺めると、亦た小さき一つの渦巻状、星雲と同じものである」と。

斯くの如く、宇宙には種々無量の星ありて、太陽の如きもの、月の如きもの、地球の如きもの、其の數無限なり。

其の中には、吾地球の如きものもあり、又吾が人類の如きものも、ありて、必ず無しとも斷定し難からん。

其中には前記金星の如き、寒暑の差、甚大にして、風、雨、雷、雪等、時を論せずして到り、食物、衣服等も、又容易に得る能はずして、惡疫、争鬪、相次いで起り、生殺、與奪、これ事とし、瞬時も止む時なく、互に怨恨を重ね、呪ひ或は咀はれなどの絶ゆること無き、有様の地球も必ず無しとも、云ふべからず、之れ等の最惡世界を地獄と云ひ。

又、それに引替へ

寒暑度に適し、風景又た四時春色を漲らし、衣食、總て意の如く、所行又總て樂しかるべき、ものゝみなる地球も、又無しとは云ふべからず、これ等の、最高社會を、極樂又は天國と稱することを得べし。

之れを佛典には「佛の遊履する處の國邑丘聚化を蒙らざるはなし、天下和順し日月清明にして、風雨時を以てし、災勸起らず、國、豊に民安くして、兵戈用ゆることなし、徳を崇び仁を興して、務めて禮讓を修む」と説かれ給ふたのである。依つて、

之れ等の絶對無限、最高國土を極樂と云ひ、其の絶對無限、最高衆生を、諸佛諸菩薩と云ふなり。

而して、之れ等の多くの、最高國土中の最極第一位たる、思惟と存在とをさへ超越したる、絶對無限、最高國土を、最高極樂と云ひ、又、其の國土の、全智全能、慈智圓滿なる最高、國王、又は君主を、世人は

「神又は佛」と云ふのである。

然して、吾々も、肉體と、心とより成る如く之の神、佛の

「御心」は全宇宙に遍満なし給ふことは、前記本體論の如し、と謂ふべし。

(ハ) 神 人 論

此所に神人とは佛人とも云ふべきなれど、文體上神人と云ふなり、

而して前記の如き、神、佛より、吾々の世界の相、及び吾々の、日々の所行を見るときは、恰も、小兒の遊戯の如く、眼前の危険、災厄あるを知らざるが如き、實に見るに忍びざるものと云ふべし。

此所に於て、其の天の「大慈悲」と、大智慧を以て佛の世界より、吾等が世界へ、天使を降し遣はされ、吾等に必ず善き世界のあるを説き教へ、且つ吾等の所行に必然的なる。

因果、の據つて起るべき根原の理を、千萬の方便を以て、説き示されたのである、この天使とは、

ヨハネ、イエス、釋尊、吾國にては、天神地神、支那の孔子、孟子、等之れ皆な天使なり、且つ、イエス、の豫言の凡人に非らざるを見ても、孔、孟の先見、洞察の非凡なる、釋尊の三世徹觀の何千卷の大佛典など、現代人の夢にだに及ばざる所なるべし。

依りて、

之れを神人と云ふなり、感謝！

八、理の線及熟語

五二

靈王 とは、單に理の線の(理)其のものを云ふなり。

理の線 とは、生命又は心と、同一なれど、無始無終に一貫せる、線なり、多く理論に用ゆ、恰も、電線の針金の如し。

靈氣 とは、業種子を含み右電線を傳播する區劃的、變遷、傳移的、氣とす、恰も最高最極の電氣の如し。

理 とは、心の生じつゝある項にある。絶対點と、宇宙萬有とを、云ふのである。

又、絶対、とは(哲學上にも、神は絶対者で

ある、とあり、又、佛典にも、佛の境界は、絶対境である)とある。依つて本書は、之の絶対的理論を、根原として、

「絶対原理を樹てしものである」

故に、之の理を現はさんがため、一切に絶対なる語を用ひしものである、従つて宇宙萬有を絶対界と名づけ、又、其の絶対界の、中心、の點を絶対點と名づけたのである。

且つ又單に理、に即す場合は、之の絶対點を「理」と云ひ、一切萬有を、理界、

又は絶対界、と云ふ。

又、之の理を「生」に即しては、心、と云ひ

又、生命と云ひ、

假りに、一つの物としては、

心靈、と云ひ、又(靈魂)、と云ふ、も其

の元は只、

「理」の一字なり、

以上は皆な、空間的に用ゆ。

又、之の、心、即ち、靈魂、の連關止むことなき延長を線と云ふ。

依つて

(靈魂)、も畢竟、「理」なるものなれば、

其延長の線と、合せ、之の、靈魂の線を

(理の線)、と云ふのである、又

佛教にては凡ての、根本を、因、と云ひ

其延長の線を、縁、と云ひ、合せて、因縁、と云ふなり。

故に文意上

理に即す場合は、

理の線、と書き、

人生の行爲などに即す場合は、

因縁、と書きたるものなれど、

之れ皆な同一なり

以上は、時間的に用ゆ、

又、佛教にては

「境に即して、涅槃、と云ひ、

人生に即して、佛、と云ひ、

理に即して、眞如、と云ふも、

之れ皆な、元は同一なり」とある、

これによつて、

五三

本書には、

理に即す場合は、單に佛を、理、と云ふのである。

而して前記の

「心、我、生命、靈魂、心靈」

之れ亦た皆な同一なる、

「理」の一字にして、且つ又、佛も「理」の一字なり、故に、

理に即しては、神、佛、と吾々とは、同根なりと云ふべし、

之れを、華嚴經に

「心、佛、衆生、是三無差別」とあり、即ち、

「心と、佛と、衆生と」、是の三つには差別なし」とある、

五四

之れは單に、理に即してのみの場合を云ふなり、

尙精しく云へば、

前項の如く「佛」も畢竟「理」、なるものにして、

宇宙萬有も、又、如何なる微細物質中に至るまで「理」ならざるはなし、

且つ（吾々の肉體も、心の中も）

（一切萬有を理界と云ふのである）から、

「理」は一切萬有に遍滿なすと同時に、神佛は一切萬有に遍滿されると云ふのである、故に

吾々の肉體中も、心の中も、神佛が遍滿されて居るのである、（神佛の本體論にあり）

故に理に即してのみ、單に、吾々と神、佛、とは同一なりと云ふのである。
茲所に於て、一心に疑ひなく

（心靈の項にある）

「靈王」 即ち

「理」、なるものに還りて

神、佛、を念すれば

神、佛、も只の「理」の一、なれば

我も、亦た、只の「理」の一、なるが故

に、又、之の二つが、只の

「理」の一、其のものと、なるのである

故に、こゝに於て

我神統にては「五臟の神君安寧なれば、
天地の神と同根なり、天地の神と同根なるが故に萬物の靈と同體なり」と、ある

のである、故に、

現世に於ての願ひ、又は

未來の願ひ、として

一心に念すれば、その

神、佛、に我心が必ず、感應」

せずと云ふこと無し、故に

一心に念する、一念の

「時、其時」とは、即ち、これを云ふなり、（慈悲の項参照）

「是れ信仰の大根原眞理なり」

之れに一點の疑ふべき餘地なし、

又、萬象、とは、物質の場合に多く用ゆ、

假令ば萬象生滅と書くが如し、

又、萬有、とは、物質的と、心的との、惣體を論ずる場合に多く用ゆ、

五五

又、佛典に、曰く

「佛」は眞如であるから、之れを單に、「如」と云ひ、(眞如縁起参照)

其の佛が、衆生濟度に、現在に吾等を救ひに、助けに、來られる、と云ふ、意味から、之れを

「來」と云ふので、之の、如と來とを併せて、「如來」と云ふのであると云ふ。

エクスタシス、とは

忘我、恍惚、奪魂、大悅等の意、人間が神と合一せる、名狀すべからざる、神秘的境涯を云ふ。

ヌース、とは、心、又は、其の本質としての理性を意味する、哲學的用語としたのは、「アナクサゴラス」。

又「プラトン」は、心を二つの部分に別ち「イデア」、の世界に應ずる部分を、ヌース、と云ひ、之れを心の理性指導者とし、

他の部分は更らに、二分し、

一つを理性に従ふもの、即ち、意氣、他を理性に反するもの、即ち、慾望とした、

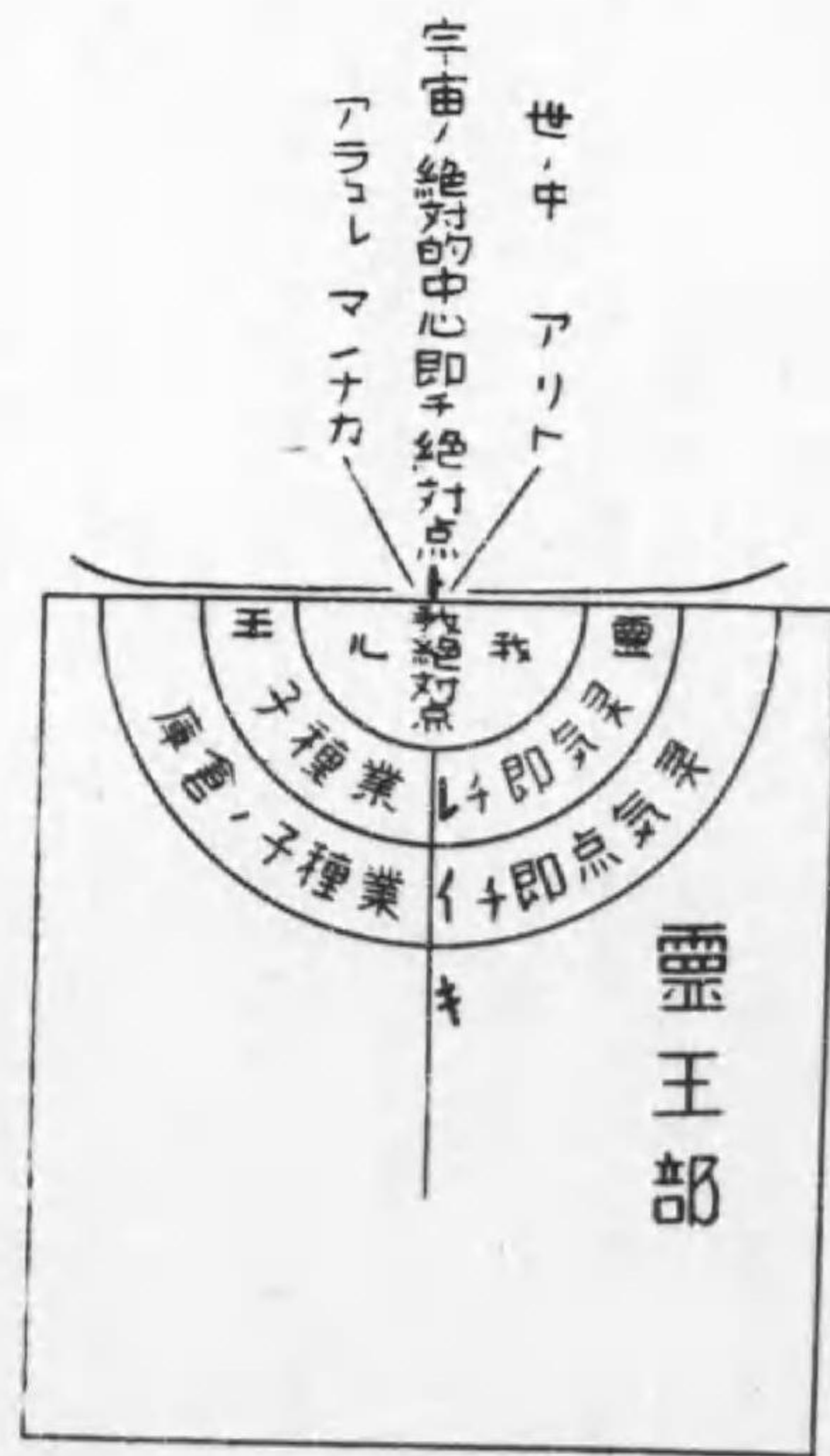
又、イデア、とは、純粹の思惟、若くは、理性に依りて把握される、普遍、妥當的な、概念的實在、凡ての實在性と、認識との根原、やがて最高の神」とある。

且つ文中(理參)、と記せるは、此の項を參照せられたき事なり。

心 靈 の 後 部

象 萬 宙 宇

(絶我と點對絶の宙宇) (絶示を係關のと點對)



之れを我が心の元の理と云ふ

又、之の宇宙萬象の絶對的中心、即ち
(絶對點)を「理」と云ひ、

又、我れ、即ち(我が心)が其の中心となりて、宇宙萬象が、恰も車の如く、
生滅無盡に廻轉しつゝあるのであるから、其の我が心も、宇宙萬象の(絶對
的中心)即ち(理)である。

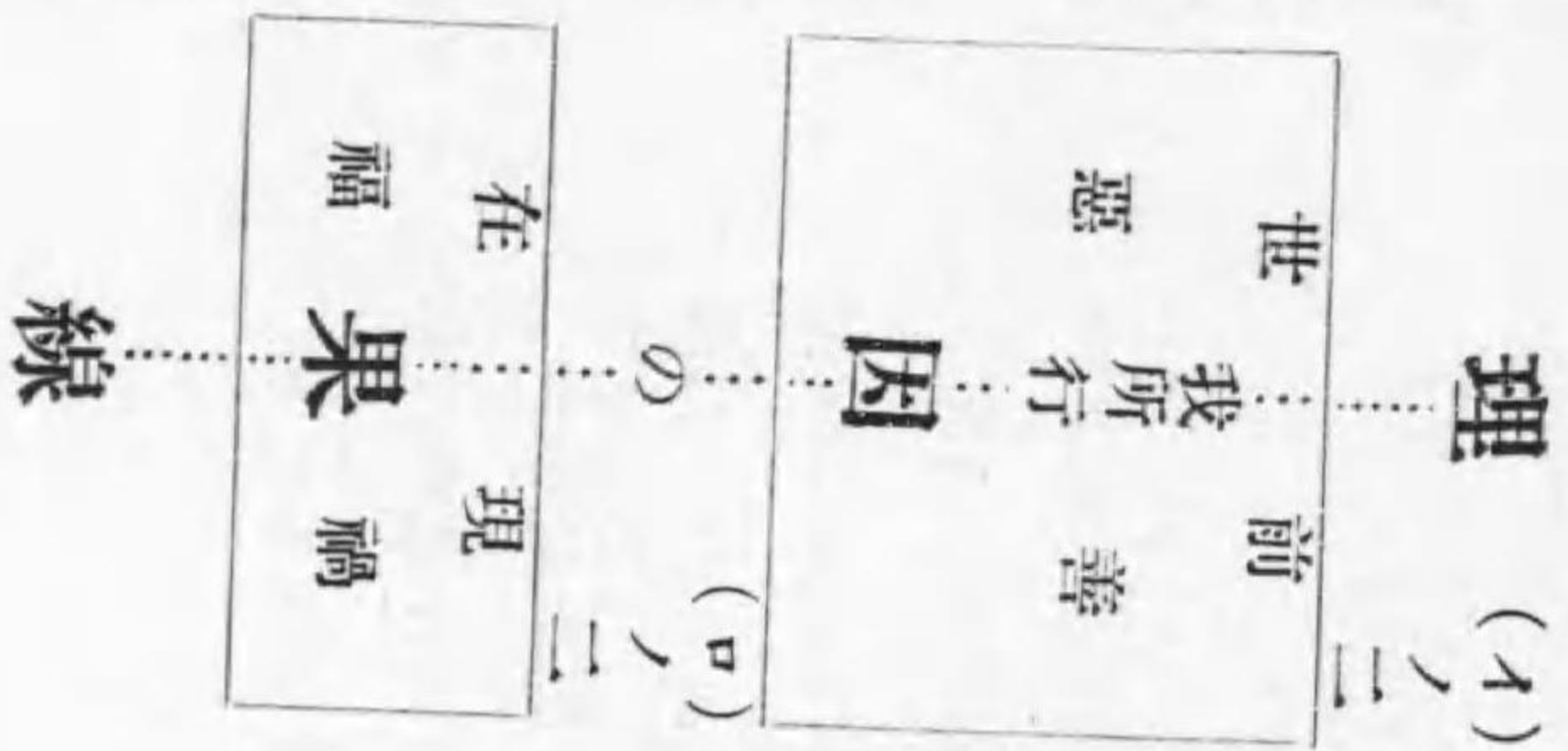
然して、之の(宇宙の絶對的中心の理)と(我が心、即ち理)と、之の二つが、
只の一つの(理)其のものであるのである。

宇宙萬有を理界と云
ひ、又其の絶對的中
心の絶對點を理と云
ふ依て其の理と



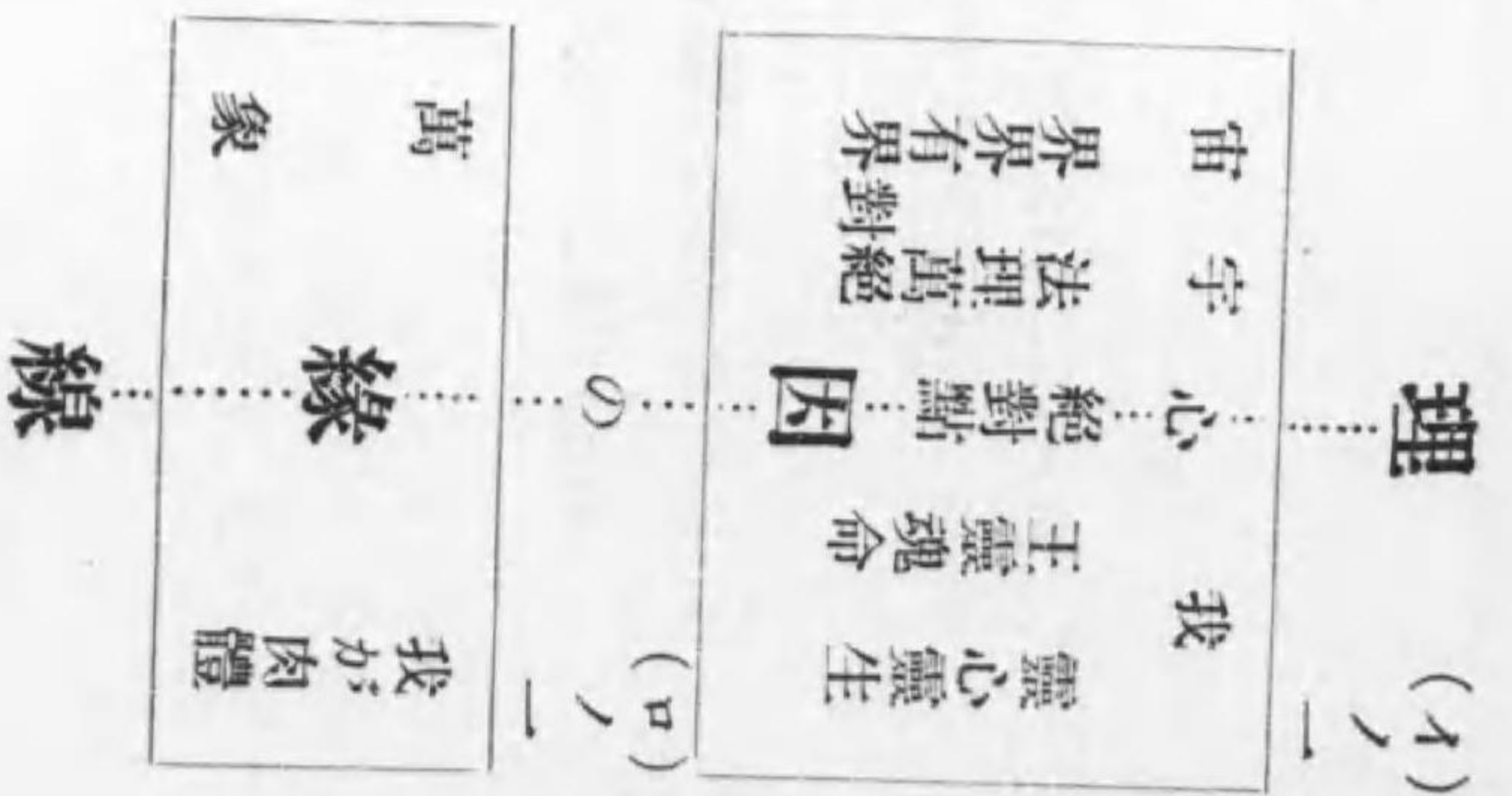
我が絶對點即ち
我が理との關係
を示せば

善惡、禍福、と、理の線、とは、恰も、天秤の
如し。



所行の理の線

1) 1、1) 2、は共に、理、そのものである
1) 1、1) 2、は共に、線、そのものである



現象の理の線

尙ほ本書の問題は難中の難たる、
 古今東西を通じての
 神祕的問題のみなれば、淺學非才の能く盡す
 處にあらざるを以て、幸ひに御賢察被下候得ば
 光榮の至りに御座候。
 就ては御熟讀の上、疑問あれば御遠慮なく著
 者へ宛て御質問相願度、直ちに御回答可申上候

頓首

昭和拾年拾貳月十五日 印刷
 昭和拾年拾貳月二十日 發行



著者兼 發行者 三田 恒吉
京都市下京區楠筒通花屋町下ル
 裏片町一九四番地
 印刷者 藤澤 淨圓
京都市下京區壬生川通五條下ル
 印刷所 同朋 舍

發行所 三田一樂園
京都市下京區楠筒通花屋町下ル
 裏片町一九四番地

終

